

関西国際空港 豊かな藻場環境の創造

関西エアポート株式会社



プロジェクトの概要

- 関西国際空港は、大阪湾南東部泉州沖約5km、水深18～20mの海域を埋め立ててつくられた空港。
- 護岸総延長24kmのうち約9割に「緩傾斜石積護岸」を採用、広い範囲に光が届き多様な海藻が繁茂。
- 空港島造成時の1989年から種苗供給を開始、各種工夫を展開したことで豊かな藻場環境がつけられた。現在空港島周辺には藻場を中心に多種多様な生き物が生息している。



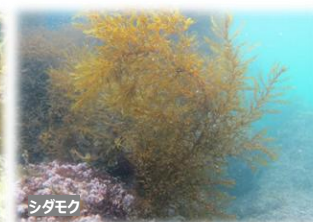
関西国際空港の全景

プロジェクトの特徴・PRポイント

- 空港島造成から現在までの35年以上にわたり、モニタリング調査や保全活動を継続的に実施し、藻場環境を創造している。
- プロジェクト範囲の藻場面積は約66ha、海藻は計58種類を確認（2025年3月時点）、自然共生サイトとしても認定を受けている。
- 良好な藻場環境の維持・拡大をめざし、モニタリング結果からみられる藻場環境の変化や、外的環境の変化に応じて藻場再生に取り組んでいる。近年では、大型海藻の母藻移植や、食害が顕在化しているカジメの母藻保護にチャレンジしている。
- 他地域への海藻移植や環境学習の実施など、地域と連携した海づくりにも取り組んでいる。



カジメ



シダモク

関西国際空港 藻場の様子



ホンダワラ類の母藻移植



仕切網で保護するカジメ

藻場再生の様子



周辺自治体海域への海藻移植時の環境学習



小学生を対象とした海上から見る空港ツアー

地域と連携した海づくり

藻場の生育状況

